

フラッシュ

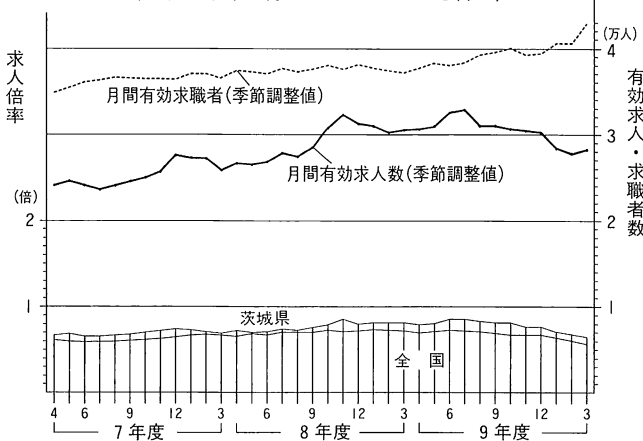
茨城県内の雇用情勢（平成10年3月）

3月の雇用失業情勢は、新規求人数が前年同月比で3.9%減と5か月連続の減少となり、新規求職者については前年同月比22.4%増と4か月連続の増加となった。一方、有効求人数は、前年同月に比べ8.8%の減少で30,697人となり、有効求職者は、前年同月に比べ14.2%増加の42,983人となった。

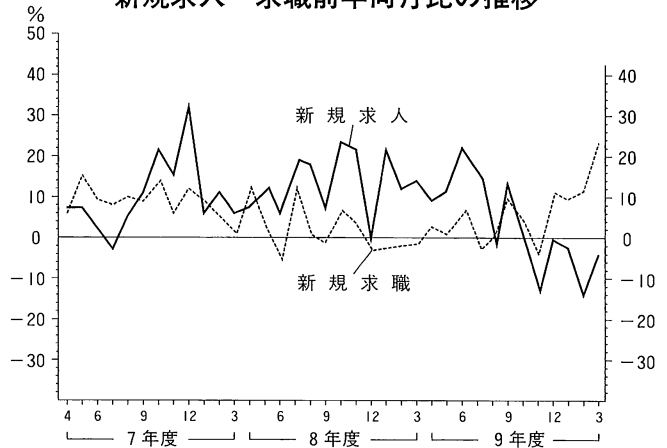
また、雇用保険受給者実人員は、前年同月比16.6%増加の16,204人となっている。有効求人倍率（季節調整値）は0.66倍と前月比0.01ポイント下回り、8か月連続の低下と厳しい状況が続いている。

有効求人・求職状況の推移

（日雇・学卒を除きパートタイムを含む）



新規求人・求職前年同月比の推移



（4月28日 県職業安定課資料より）

茨城県内のGW中の人出 前年比15万人増

県警地域課は七日までに、ゴールデンウィーク期間中（4月25日～5月5日）の県内の行楽地などの人出を集計し発表した。今年は平日をはさんだ連休11日間のうち、半日が雨などの天候不順となったものの、前年に比べて15万1,000人増の87万1,000人が行楽地を訪れた。

県内各地の人出状況は、笠間・陶炎祭の13万6千人（前年比4千人増）が最高だったが、水戸の偕楽園も徳川慶喜展示館の開館などもあって、一挙に前年比3万1500人増の12万6千人となった。そのほか日立・神峰神社大祭礼に12万500人、大洗海岸には11万6,500人、大子・袋田の滝には6万4,000人がそれぞれ

を訪れている。

JR水戸支社も連休期間中の列車利用状況をまとめたが、それによると常磐線特急の乗車のピークは、下り列車が5月2日の「スーパーひたち39号」で、乗車人数は848人（前年比307人減）。一方、上り列車は同五日の「フレッシュひたち38号」で、乗車人数は前年とほぼ同じ1,205人。

同支社でも、千波湖畔の徳川慶喜展示館に併せて偕楽園臨時駅をゴールデンウィーク期間中初めて開設。そのうち最も多く利用された日は5月4日で1,506人。一日平均582人が降車した。常陽新聞（5月8日）より

茨城県人口300万人到達記念事業検討委員会発足

本県の人口は平成11年頃に300万人に到達する見込みである。これを記念した事業を展開するため県は4月28日、「県人口300万人到達記念事業検討委員会」（会長・幡谷浩史 大好きいばらき県民会議理事長）を発足させ、水戸市内で第1回会合を開いた。

県人口は、昭和22年に200万人を超えてから、約50年の歳月を要して、まもなく300万人になろうとしている。今年4月1日現在の人口は2,979,645人。このところの増加率から推定して、早ければ来年夏ごろ、遅くとも秋口には300万人に到達する。

同委員会は、企画経営者や学識経験者、ミニコミ誌編集者、イベントプロデューサーなど各分野からの12人の民間人で構成されている。

初会合では、冒頭に角田副知事から「本県は限りない発展可能性を秘めており、人口300万人達成を機会に、県民としての一体感を醸成し、達成を内外に広くアピールすることで、県のイメージアップを図りたい」旨のあいさつがあり、同委員会では

9月までには記念事業の原案をまとめるとしている。

次に、各委員からは「人口が300万人になっただけでは、大多数の県民は『何が変わるのだろうか』と懐疑が残るだけである。記念事業はイベント中心主義はやめた方がいい。ありきたりのものではなく、何か目立つような事業としてほしい。」

「一過性のイベントで終わらずに、システムとして後に残るものを考えてみるべきである」

「人口300万人達成とは、どのような意味を持つのか目標とコンセプトを明確にして事業を展開すべきである」

「人口と所得は、地域発展のバロメーターであり、人口が増えるのは基本的には良いことであり、素直に喜ぶべきこと。イベントは県民に分かりやすいものとすべきである」

——などさまざまな記念事業の考え方が提案された。

今後、同委員会は、今年9月までに4回開催され、記念事業のプレイベントおよびイベントの原案をまとめるため知恵を絞ることになる。